

別の環境に身を置いてみる

公益財団法人 日本農業研究所 理事・研究員（東京大学・福島大学 名誉教授）

生源寺 眞一

今年で後期高齢者に移行することもあるが、来し方を振り返る気持ちが強くなった。学生の指導を思い起こすと、講義やゼミや論文への助言はルーチンとして取り組んでいたわけだが、そのほかに学生たちと現地調査に訪れたこともよく覚えている。調査ではなく、田植や稲刈でともに汗を流すこともあった。長野県飯山市の山間部の水田には、東京大学・名古屋大学の大学院のゼミ生などと10年以上通った。地元農家と都会の人々の交流の場として企画された「蛍の宿を守る会」に参加するかたちであり、いわば泊りがけの農作業体験だった。

学生とともに訪れた現地調査には、海外渡航のケースもあった。かつて私が所属した研究チームは、中国の雲南省の農村部に何度も足を運んだが、ゼミの大学院生が同行したことも複数回あった。欧米の先進国、とくに西欧での調査研究に大学院生が足を運んだこともある。イギリスやドイツ、フランスなどで、助教クラスの若手研究者が手伝ってくれた訪問もある。大学院生などの若者が同行というわけだが、そのさいに何か課題を与えていたわけではない。私自身の取り組みや私の所属する研究チームの活動に身近に接してもらうこと。これが同行を促したねらいであった。過去に体験したことの無い環境に身を置いてみることに意味があるとの判断があった。

これは私自身の若かりし頃の経験から得られた思いにほかならない。新たな環境との出会いによって、それまでは考えつかなかった問題意識が生まれたのである。ここが大切だと思うのだが、別の発想を得ることを目的として新たな環境に身を置いたわけではない。ふたつの転機を紹介しておく。ひとつは1981年に鴻巣に本部のあった農事試験場から札幌の北海道農業試験場に転勤したことだった。兼業農家が多数派の関東東海のフィールドから離れ、専業中心の北海道での調査研究に従事することになった。ただし、このような研究テーマの転換を想定して異動したのではない。ある晩、それまでは存じ上げなかった北農試の研究室長から「北海道に来ないか」との誘いの電話をいただき、その場で「行きま

す」と返答したことを覚えている。

専業農家の経営行動を定量的に分析する仕事に取り組んだわけだが、農家の判断と行動が合理的であることを痛感する結果となった。それだけではない。鴻巣時代には兼業農家のヒアリングを夕食後の時間帯に行うこ



ともあったのだが、田植機の普及や就業機会の立地分布などの異なる条件下において、兼業農家の判断も合理的との認識を持つことになった。新たな環境には以前の環境下の問題意識に変化をもたらす効果もある。

もうひとつの転機は、1990年度にイギリスのケンブリッジ大学で客員研究員として過ごしたことである。これも研究テーマがあって手を挙げたわけではない。大学に転勤後、学会の事務局担当などで疲弊している小生を見かねた先輩教授の配慮によって、海外滞在の機会をいただいた。研究プランなしの滞在となったが、当時はウルグアイラウンドの進展のもとで共通農業政策の改革の検討が進みつつあった。ECの政策についてイロハから学ぶことになり、誠に充実した1年となった。従前の環境下で漠然と認識していた日本の政策についても、ECで得られた観点から研究に取り組むことになった。これも別の環境に身を置くことで新たな着眼やアイデアが生まれた経験であろう。

研究者として歩んでいる元ゼミ生には、私とともに接する機会のあった国を対象とする調査研究に打ち込んでいるケースもある。あるいは飯山を学生の現場指導の場として活用している元ゼミ生もいる。ある卒業生は飯山の集落に移り住んでいる。繰り返しになるが、別の環境に身を置くことで新たな着眼やアイデアが生まれることもある。こんな思いも間違いではなかったと振り返る今日この頃である。